

〔博士論文 要約〕

視覚障害者の触覚を通した立体造形の鑑賞に関する研究

令和元年度

半田こづえ  
筑波大学

近年、各地の美術館で彫刻作品などに触って鑑賞できる展覧会が開催されたり、劇場で舞台美術に触ったり空間を感じることができる機会が提供されるようになってきた。このような取り組みは、成人の健常者を観客として想定し、人間の感覚の中で視覚を主たる鑑賞の入り口としてきた従来の美術鑑賞のあり方を問い直し、新たな広がりを生み出す可能性を秘めていると考えられる。しかしながら、触覚を通した鑑賞に関する研究の蓄積は極めて少ない状況にあり、より充実した鑑賞を実現するための研究が必要とされている。本博士論文は、視覚とは異なる触覚という感覚に依拠した鑑賞の過程を主題としている。本研究では、①芸術作品に触れて鑑賞するとはどのような営みであるのか、②触れる鑑賞体験を充実したものにするためにはどのような方法が可能であるか、という二つの問いを設定した。これらの問いを検討するための視座として、豊富な触覚的経験を有する視覚障害者の触覚を通した鑑賞の過程に着目した。本研究では、①鑑賞者が作品の鑑賞を始めてから終了するまでの過程全体を考察することにより、触覚を通した鑑賞の豊かな側面（強み）と課題点（ニーズ）を記述すること、②それらを踏まえた鑑賞支援の方法を実践し、その役割・影響を検証すること、を目的とした。

本研究の方法として、鑑賞者の言葉を分析の対象とする質的アプローチを採用し、研究の蓄積が多くなされている視覚を通した鑑賞に関する研究及び博物館の来館者研究におけるいくつかの分析方法を参考にした。

第1章では、触覚を通した鑑賞に関わる社会的背景を概観した。1960年代後半に欧米の美術館（我が国では、作家が主催する公募展）において試みられるようになる触覚を通した鑑賞は、当初視覚障害者を対象としていたが次第に全来館者を対象とする展示が増えてきたことが明らかになった。一方、我が国の視覚障害児に対する美術教育では、制作の分野に比べ鑑賞の分野に課題があることが指摘されていた。また、成人の視覚障害当事者は、美術館のアクセシビリティ向上の要件として、視覚以外の感覚で観察・鑑賞できる展示と美術館のスタッフによる解説を求めていることが明らかになった。

第2章では、本研究の前提となる先行研究を検討した。その結果、視覚障害と美術に関する考え方は時代とともに大きく変化してきたことが明らかになった。その中でも問題とされてきたのは、造形芸術の創作と鑑賞の前提とされる「同時的表象」を得ることが触覚によっては困難であるという点であり、初期の研究では、触覚を通した鑑賞は不可能であるとされていた。

これに対して、美的発達モデルに基づいた Housen らと DeCoster の研究は、美的発達という観点から晴眼者と視覚障害者の鑑賞を検討した点で意義深い。しかし、触覚を通した鑑賞については検討の余地が残されている。もう一つの視座として、鑑賞の構造・過程に関するモデルを検討した結果、視覚を通した鑑賞では、「観察-分析-解釈」の3分岐が広く認識されていた。

一方、触覚を通した鑑賞の過程を検討する上で参考になる知見として、美術館で来館者がアイマスクをして彫刻を鑑賞する展覧会が開かれた際、鑑賞の手順を音声ガイドで説明した広瀬の論考がある。広瀬は、「つなぐ」・「つつむ」・「つかむ」というキーワードを用いて触覚を通した鑑賞の手順を示している。これらのことを考え合わせると、視覚を通した鑑賞と触覚を通した鑑賞には共通する過程が存在するのではないかと推測できる。また、触覚を通した鑑賞には、手と心と身体がかかわることから生まれる豊かな側面と、頭で全体像を描く（すなわち「同時的表象」を自ら描く）ことが必要であり、それが課題点になりうると考えられる。そこで本研究では、以下のような具体的な研究課題を設定した。①視覚障害者の触覚を通した立体造形の鑑賞ではどのような過程を経て鑑賞が深まっていくのか、②その過程には触覚を通した鑑賞の豊かな側面がどのように表れるのか、③反対に触覚を通した鑑賞の課題点はどのように表れるのか、④触覚を通した鑑賞の課題点（ニーズ）として「同時的表象」を自ら描く必要があることが考えられる。そのニーズを満たす方法として美術の専門家との対話が有効なのではないか、⑤触覚を通した鑑賞の豊かな側面（強み）として手と心と身体がかかわることが考えられる。触覚を通した鑑賞の強みを生かす方法として鑑賞者自らが制作過程を体験することが有効なのではないか。

第3章では、上記の研究課題の①～③について検討・考察した。豊富な触覚経験を有し美術鑑賞の経験が異なる16名の成人の視覚障害者が彫刻を鑑賞しながら語った発話プロトコルを分析することにより、触覚を通した鑑賞の過程を記述した。その結果、触覚を通した鑑賞過程は、視覚を通した鑑賞過程と、構造は基本的に同じであり、具体的には以下の段階を経て深まって行くことが示された。①観察：作品を、全体から部分、部分から全体へと行きつ戻りつしながら観察し、作品の素材・形などに関する情報を得る、②統合：得られた情報を頭の中で融合し、一つの像としてまとめる。さらに、そのイメージを頭においた上で作品を触りなおし、納得のいくイメージを形成する、③分析：作品の造形要素を比較、分析し、作品に関する思考を深める、④解釈：作品を味わい、鑑賞者自身の中に生まれた感情を吟味し、作品の意味を生成する、⑤評価：作品の造形要素や作者の技術などに基づいて作品について判断する。

鑑賞過程に現れる触覚を通した鑑賞の豊かな側面（強み）は、時間をかけて作品と関わる中で、鑑賞が深まることであった。特に素材感については、鑑賞の初期の段階では、作品の素材であるブロンズの冷たさや表面のごつごつした質感などが感受されていたが、作品のイメージが形成された後ではその表象から得られる素材感と融合し、作品全体の印象として暖かさや柔らかさが享受されていた。このことは、触覚が美を享受する働きを有していることを表していると考えられる。

一方、触覚を通した鑑賞の課題点（ニーズ）は、作品のイメージを形成するために集中した観察が必要であり、イメージ形成をもって鑑賞が終了してしまう傾向が見られたことであった。さらに、重要なことはこのような課題点が鑑賞経験の少ない人たちに現れたことであった。

第4章では、上記の研究課題の④について検討・考察した。年齢からいって鑑賞経験が少ないと考えられる視覚障害のある高校生13名に、単独で彫刻作品を鑑賞してもらい、次いで美術教育に携わる彫刻家との対話を交えて同じ作品を鑑賞してもらった。単独の鑑賞時の発話プロトコル及び彫刻家との会話を分析した結果、美術の専門家との対話は、視覚に障害のある高校生が作品のイメージ形成において感じる不安を解消し、さらに、鑑賞の深まりへの道を開き、喜びのある活動にしていることが明らかになった。このことは、成人の視覚障害者が美術館のスタッフによる作品の解説を求めていることとも一致しており、触覚を通した鑑賞における対話の重要性を示していると理解できよう。

第5章では、上記の研究課題の⑤について検討・考察した。美術館において開催されたある展覧会において視覚障害者5名と晴眼者5名にペアになって形象土器を鑑賞してもらい、土器の製作過程を体験した後もう1度作品を鑑賞してもらった。2度の鑑賞中に交わされた会話を分析した結果、視覚・触覚・聴覚・嗅覚等様々な感覚を通して鑑賞し、制作する過程を経ることによって、鑑賞が深まることが検証された。また、鑑賞後に行われたインタビューの分析から、視覚障害者と晴眼者という異なる背景を有する鑑賞者どうしの対話が互いの鑑賞を深めたことが明らかになった。

本研究の結論を、冒頭で述べた二つの問いに応える形で述べてみたい。触覚を通した鑑賞に関する研究は極めて少ないばかりでなく、触覚を通した鑑賞は視覚を通した鑑賞の基準に合致しないため不可能であるという見解と触覚を通した鑑賞と視覚を通した鑑賞は同一であるという見解が存在しており、結論が示されていない状況であった。そこでまず、触覚を通した鑑賞を、美術鑑賞という文脈に位置付けることが必要であった。そのため本研究では、芸術作品に触れて鑑賞するとはどのような営みであるのかという基本的な問いに答えることを試みた。本研究が至った結論は、触覚を通した鑑賞は、鑑賞の持つ普遍性を備えており、かつ触覚という感覚の多義性を反映するという点で独自性を有する過程であるということである。すなわち、触覚を通した鑑賞過程の基本的な構造は視覚を通した鑑賞と類似しており、それは作品のイメージ形成から意味の生成へと向かうプロセスである。だが一方で触覚を通した鑑賞は、時間とともに深まる体験であり、その過程において触覚の多義性、すなわち、対象の性質を感受する働き、対象の形態を知る働き、そして対象の中の美を享受する働きが次第に姿を現し、鑑賞者の中で力点の置かれる働きが変容して行くという点で独自性を有するのである。そして、本研究の二つ目の問いは、このような触れる鑑賞体験を充実したものにするためにどのような方法が可能であるか、ということであった。この問いに答えるため本研究では、触覚を通した鑑賞の豊かな側面と課題点に注目し、鑑賞者自らの制作プロセスの体験と美術の専門家との対話を実施し、それらの方法が触覚を通した鑑賞を深めるという事実を検証した。本研究からの示唆として2点指摘できるであろう。一つは、美術に親しむ経験の少ない鑑賞者にとって、美術の専門家との対話が重要な役割を果たすことであり、もう一つは、美術館において様々な背景を有する人々が触覚を通した鑑賞を体験する際、鑑賞者自らが作品の製作プロセスを体験することが鑑賞を深める有効な方法となりうることである。本論文における考察が、視覚障害のある人々のみならず我々全てにとって、美術鑑賞の新たな広がりを生み出すための手掛かりとして僅かなりとも有益であることを願ってやまない。